

ほつ  
堀

た  
田

いずみ  
泉

学位の種類 博士(文学)  
学位記番号 文博第 206 号  
学位授与年月日 平成16年 1 月22日  
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当

学位論文題目 モダニティにおける都市と市民

論文審査委員 (主査)

教授 吉原直樹 教授 高城和義  
教授 海野道郎

## 論文内容の要旨

### 1 論文全体の目的と内容構成

本論文は著者が長年にわたって取り組んできた、都市研究をつうじた社会—歴史認識の構築への試みである。とりわけ、1970年代以降の先進資本主義諸国における高度経済成長の終焉、80年代以降顕著になる科学技術の高度な発展、90年代以降、冷戦の終結とともに急展開する世界政治における権力関係や対立構図の転換、そして世界経済の不安定かつ急激な構造変化といった社会的現実の変容と行く末を視野に収めながら、新たな時代と社会を構成すべきものの確定に向かって、過去の社会理論を理論史の流れの中で再点検し、そのいかなる遺産を今後に生かし、いかなる部分が欠如しており、今後どのように課題とすべきかを反省的にとらえる研究を積み重ねたものである。

その際、基本的になる理論的視角は、人文・社会科学の各分野で活発に議論されている「近代の問い直し」という問題構成であった。このことは、それが成立した近代西洋の社会としての質を正面から吟味し、われわれの社会に照射させてその意義を問うことを要請する。したがって、批判的意識をもちつつ「近代西洋なるもの」を明確にしようとしたマックス・ヴェーバーを中心に展開する社会学理論を、本研究全体を貫く骨組みとして定礎するために、私なりの解釈を提示し、意味付けをなそうとした。そして、ポストモダンの議論が賑やかな現代にあつて、かれの問題意識の継承や拒否の流れを整合的に理解しようとした。これが本論文第1部の主たる目的となっている。

ドイツや日本におけるヴェーバー研究の堆積は大きく、とりわけ文献批判的・個人史的研究は学界に日々新たな成果をもたらしている。著者もかつてはその方向で継続的にヴェーバーに取り組んできた。また、かれの歴史認識をめぐって近年では、近代市民社会を奉ずる者としてではなく、ニヒリズムの系譜に位置づける刺激的な議論が華やかである。本論文においては、それらに適宜注視し、意識をしなが

ら議論を進めてはいるが、正面からこの問題圏に介入することはしなかった。そうではなく、ヴェーバーにおいて近代西洋社会を構成し、現代社会に持続的に影響を与えているものの本質一すなわちモダニティーとは何かを確定することを第一に考えた。その場合、ヴェーバー自身においては、方法的にはいささか不明確でかつ不徹底である点を有することは否めないにしても、モダニティーを社会形成の普遍的な価値理念として現代社会の存立の立脚点であるべきポジティブなものとして、同時に現代社会の社会管理的、抑圧的結果をもたらすネガティブなものとして、この両面的な意義において、しかも相互に浸透しあうモメントを蔵するものとして最後まで維持しようとしたことが、本論文の方法態度に決定的に影響を与えた。それは後述するように都市と深いかわりをもつ市民社会をこの両面性においてとらえていくという点においてである。そしてこの市民社会という概念で現代社会を照射するならば、いままさまに変容しつつある社会の様態の把握にとって、この概念に方法として準拠することがなお有効であり、しかもまた、その後の多くの社会理論と相補しあい、対決しつつ新たに鑄直され、今後にかき立てられていかなければならない、という本研究全体の主張とその論証へと結びつけられている。

「近代とはなにか」という問いは、社会科学全体に貫通する重い問いかけであるが、それ自体としては究極的にして抽象的な問いであり、何らかの媒介なしには茫漠たるものでもある。経験的な社会学研究として、この問題意識を具現化していくには、それにアプローチすべき現実的な橋頭堡が必要であると考えられる。近代西洋の歴史に即してみると、政治学では「民主化」が、経済学では「産業化」が、そして社会学では「都市化」が主に「近代化」を特徴づけるものとして注視されてきた。この三つは相互に深く関係しあって「近代」を構成していく要素であるが、社会学研究として、しかも理論と現実を切り結ぶものとして、本論文ではとくに第2部において「都市」を中心にこれらの関わりを問う議論を進めた。モダニティーを考える具体的な場所と諸問題、それは現代社会にあっては都市をおいてない。そして、この都市社会として進展する現代社会の未来の方向をできる限りリアリティをもって探ろうと留意して、論述を進めた。しかし第1部の社会理論の検討の成果はここでも生かされているのであって、やはりヴェーバー理論とその受容展開の様態が出発点と全体の骨格にある。

近代資本主義の巨大な物的な生産性を支える精神的基盤を解明した者としてヴェーバーの名は知られているが、この経済制度を成立させる基底としてかれは民主的な市民的諸関係を押しえ、それが非民主的なものに推転していく道筋をも射程に入れて理解していた。しかもそれが西洋古代から都市という磁場に根ざすものであり、その関連の必然性の根拠を歴史的・理論的に問おうとしたのであった。この社会関係をひとつの方法的・理念的尺度として措定するならば、それは西洋という空間的制限をこえて日本やニューヨークにおける都市研究にも適応可能であり、かつ有効でもある。その際に、西洋中心主義に陥ることに自戒をしつつ諸社会の特質を生かしながら、あるべき社会への水路を探ることができる。市民意識を当該の社会の中で育むことによって、抑圧的社会関係を止揚する具体的な筋道が第2部の中盤で探られている。

そして他方、市民社会論については、ヴェーバーに関わるものに限らず、その歴史的限界や問題性が多くの立場からつねに指摘されてきた。ポストモダニストやニヒリストの視点からいうと、それはつまるところ近代そのものを丸ごと擁護する立場に帰着し、生産力に傾斜した西洋礼賛的理論として、自ら近代の罪業を生み出したという点に無自覚であると断罪される傾向があるのである。しかし、現代社会の変貌をフォローしていこうという問題意識の中で、次々と生み出される新たな社会理論のなかに、自立し、あるいはしようとする個性を相互に認め合う同市民関係を核にして社会形成を果たそうとする思考の系譜は脈々と息づいており、なおその意義が数々の社会理論との対質のなかで検証され、新たな意味を付与されてもいるのである。この観点から、経済理論に端を発し、社会的ハビトゥスなどを射程

に含むレギュレーション・アプローチや、哲学的認識を中心としつつポストモダニティを構想する構造主義／ポスト構造主義や70年代以降、めざましく展開する都市理論・新都市社会学といった広範な領域の社会理論相互の接点や分岐点を探ることを通じて、「都市思想」という概念を提起しながら市民社会論の現代的意義を再確認しようとしたのが第2部の最終部分であり、全体の結語的部分を構成するものである。

まとめていえば、本研究の背景に著者は、世紀の変わり目とともに顕著になりつつある社会構造の変化やテクノロジーの進展による生活様式の変化が、ポストモダニズム的言説の氾濫の中で何か未来に期待を抱かせるといふよりもむしろ、行き先の見えない閉塞感を蔓延させつつあるという社会意識を醸成している、とみる。それは「近代」への問い直しという問題を核にした新たな歴史認識への渴望を生み、ポストモダンの系譜をもつ諸理論もこの流れで現実をリアルにとらえるのに一定の役割と有効性を果たして来た、と考える。とりわけ複雑性をともなうもの、コンテンジェントに生起する諸事象や心象の理解にとって。しかし、よく指摘されるように、それらは21世紀を直接説明し、導き出す射程にも直接の動機、理論構想にも欠けているのが現状である。したがって、ここで試行したのはマックス・ヴェーバーやライト・ミルズなどの「近代の社会理論」のなお受け継ぐべき部分を析出しつつ再構成し、その観点からポストモダンの社会諸理論の内容と方向の可能性を組み入れるということだった。哲学や思想史の領域で思念されたものを経験科学で再活性化させることは学問の学際化に貢献しうる。本論文はその問題意識と目標に沿い、都市という磁場で展開される社会的諸関係の新たな構築を歴史理論的に展望したものである。

## 2 各章の問題設定と主張

### 序章 モダニティの凝縮と拡散

序章は、本研究全体を貫く方法態度と立場を開示したものである。現代社会の変貌はモダン／ポストモダンの議論の枠組みでいうと、モダンと対比的に、すなわち反対命題として想定されるポストモダン状況といったものが押し寄せているのではなく、モダニティの凝縮と拡散が起こっていると考えられるべきであるという提起がなされる。これはギデンスのいう「埋め込み」、「脱埋め込み」の議論に触発されたものである。

その傍証として、①グローバリゼーション ②脱分化・脱境界化 ③個人主義の融解と再社会化 ④消費におけるアイデンティティ形成、といった現代社会の変化や変貌の様態の中心になる 이슈が順次検討に付される。①についてはトムリンソン、オルブロウ、ロバートソンの見解の相違を通じて社会全体としてのグローバリゼーションの遂行のなかにローカルなものを組み込むことの必要性、すなわち凝縮と拡散の視点が説かれ、グローバリゼーションがモダニティの帰結であることが示される。そして、モダニティの完遂する先に、あるいは臨界点の中から変革が必然的に展望されてくる、という本研究全体の主題が定位される。そしてグローバリゼーションの理解のしかたが、モダニティの概念を規定する際に決定的であることが説かれるのである。

②③④についてはグローバリゼーションの進展や人間の生きる環境の変化に対応して、個人のレベルで近代西洋的な自立的個人が脱分化されるかたちで融解しつつあることを示し、その理解の仕方として、ここに新たな共同体の可能性を探るのか（マフェゾリ）、この事態への反省（再帰性）を経たうえで個人の再構築を考えるのか（ベック）、といった議論の対立をまず示した。そのうえで、両者の論拠を統合するかたちで、新たな共同性のなかで個人意識の深まりが変革の条件となることを示し、それには近代的個人を否定するのではなく、モダニティへの沈潜が決定的に必要なこととの確認がなされるのであ

る。したがってこの序論は、全体への指針となるだけでなく、以下の論究で、ヴェーバーのような古典的な社会学理論をモダニティを理解するものとしてどのように読み込んでいかなければならないか、ということをも示唆しており、次への導入になっている。

## 第1章 技術と組織の近代的編成

それではモダニティを考えるにあたってヴェーバーの社会理論はいかなる意味を有するか。本章は20世紀中葉、いわゆる「フォーディズム」による大量生産・大量消費（ゆたかな社会）を先駆けて実現したアメリカの産業化・大衆社会化の現実を背景に、産業社会学的視角から、とくに技術論と組織論の文脈で、ヴェーバーの受容をめぐる批判理論的系譜と機能理論的系譜との対立を浮き彫りにし、ヴェーバー自身がこの問題設定ではどのような回答を用意しているのかを検討している。

具体的には、ヴェーバーが西洋近代合理主義（モダニティ）の帰結として予感した官僚制的化石化がアメリカ社会では徹底して進展しており、権力によって個人が思いのままに操作される抑圧性を前面に出ているとアメリカ社会をみるライト・ミルズ（およびその状況を「一次元的人間」として告発するマルクーゼ）と、社会システムのなかで個人の能動性を確証させる条件を探るパーソンズ（およびそれを近代西洋の民主主義のなかに再措定しようとするドイツのシュルフター）の対質がどちらも批判的に叙述される。そしてこの対比の意味の裏づけは両者の人間関係学派への対応・評価の仕方からなされている。また、フォーディズム的な労働組織や、専門化と一般化の視点の統合が必要な医療組織が例示されて議論の抽象性を避けるようになっている。そして前者の系列のヴェーバー理解では労働の組織や社会形成を説明する動態的視点がないこと、後者の系列では諸社会層の現実の対立を予定調和的にシステムに押し込める点が批判的に指摘されている。

したがって、ここで意図されているのは、モダニティそのものの歴史性や問題性を正面から問う（第2章）前段階として、モダニティがもつポジネガの二重的性格と、その両面が分かちがたく存在するありようを具体的に明示するところにあった。そして結論部分で、これをヴェーバー自身に投げ返してみると、実は、かれの根底には、どちらに傾斜すべきという問題の立て方ではなく、両者を引き受け、これを維持徹底させながら社会に向かうというモダニティ観が用意されていたことが主張されるのである。

## 第2章 マックス・ヴェーバーの近代世界

本章は、ヴェーバーの近代認識を正面に据えて、その方法と内容およびその意義を、かれの作品史を追跡し、概括することによって明確にし、本研究の方法的核となるモダニティの歴史性や社会性の内容と問題状況を定位するものである。

前章でみたように、ヴェーバー自身に本源を発するとされるべき近代市民社会に対するアンビバレントな姿勢は、かれに終生つきまとって離れなかった種類のものであった。とくに初期ヴェーバーに顕著であるが、前近代的な身分制的色彩を強力に帯びたビスマルク・レジームに対抗して「近代化」の意味内容に刻み込んだ市民的な政治教育の必要を訴える側面と、中期ヴェーバーを代表する資本主義の精神論で、資本主義社会として展開する近代社会を近代官僚制的「鋼鉄の檻」として暗い色調で描く側面との対立的な近代理解は、合理化、事象化、Entzauberungといった概念を彫琢しつつ『世界宗教の経済倫理』、とりわけ「古代ユダヤ教」に遡及してその淵源を追うことになる。その過程で、また、社会学的範疇論として展開した『経済と社会』の合理化／合理主義にかんする概念規定の過程で、かれが極めて多面的な視点から相矛盾する要素を包含しつつ、多元的に合理化を考えていることをここで示した。

そしてそこから導出される近代の様態は、一方の進行が他方の条件を生み出すというパラドキシカル

なものであると本論は主張する。それぞれの面を一元的に強調すれば、批判理論的な「出口の見えない」、しかし近代社会の病巣の中心を扶る議論にも行き着くし、逆に「道具的理性」を自由の拡大として社会システムに組み入れる道も開ける可能性もあり、その後の社会学諸理論の展開を先取りすることになった。しかし本章における理解ではヴェーバーは、あくまでもこの両面を生かすかたちで考えていたということである。近代官僚制の徹底のなかに「市民的」なものを埋め込む、あるいは埋め込まれていたそれを掘り出す、ということをかかれは想定していたと結論づける。近代に対する否定的、ニヒリズム的解釈が強調されている最近の内外のヴェーバー研究の傾向を念頭に置き、ヴェーバー自身のなかにあるポジティブな近代理解がネガティブなものを必然として含むことによって、なお有効性を保持している、ということがここで論じられている。

このような認識をもってヴェーバーが位置していたのは、モダニティの歴史性を考えると、近代の問題状況が成果と病巣が裏表になって、社会の中で実体的な形をとり始めた時点であり、それを本書では、以下のポストモダン議論を念頭において「古典的近代」と規定する。したがって現代へと時代が進むにつれて、問題は次のようにヴェーバーの場を飛び立っていくことになる。

### 第3章 モダニティの変容

さまざまな問題点や可能性を孕む「古典的近代」が現在に向かって進行し、成熟していくにつれて、序章で示したように世界全体にモダニティの変容が訪れる。本章ではそれを政治経済的な変化を根拠として、70年代はじめと規定しているが、この過程がどこに進むのか明確な未来像を結ばない時点では「ポスト」という曖昧な接頭辞が付され、社会理論を賑わすようになる。本章はそれを「ポスト産業社会」と括り、それを構成してきた系論として脱工業社会（ベル）、アフター・フォーダイズム（レギュラシオニスト）、ポスト社会主義（トゥレーヌ）等々の近代認識と危機意識のありようを吟味する。そしてそのなかから産業社会の深化の実態に対する認識を欠落させないことの重要性が説かれ、モダニティに内在しつつ、そこから未来を探ろうとするハーバーマスの「対話的理性」と、ギデンスの「ユートピア現実主義」が検討される。それらの議論のスタンスは評価されるが、前者は民主的社会関係の産業社会へのフィードバックの欠落が、後者にはポストモダンとモダンの関係を説明するのに陥りがちな対比的思考—反現実的対置—に傾斜している点に限界があるとされる。そしてそれは同時に、それらの欠点を突いてポストモダンの社会理論（ここで扱われるのはフーコー、リオタール、ボードリヤール等）が登場してくる必然的道筋を暗示していた。

その検討を通じて、現代哲学や倫理学におけるポストモダン理論の出現は、ここまで論じてきたモダニティのポジとネガが、解放と危機（あるいは抑圧）とに置き換えられ、現代的状況としてはますます鋭く表裏一体になりつつあるということを意味していた。ここには情報技術や科学技術の質的变化も背景で重要な役割を果たしている。そして近代的理性批判としてのポストモダン論には（反動的な種類のものもあるが）民主主義的感覚への鋭敏な嗅覚や、現実批判の強力な武器としての役割は認められるものの、歴史認識を欠落させたモダニティ批判よりも、モダニティの論理を透徹させることがハーバーマスやギデンスを超えていく地点において、なお必要とされることが提示される。

### 第4章 都市思想の政治経済的古典理論

第2部の冒頭となる本章は、以上のように進めてきたモダニティとその変容に関する理解を前提として、近代都市のなかで市民性がいかに生まれ、展開されるかを、政治経済理論のなかで確定し、あわせてその内容を「都市思想」として提起しようと意図したものである。

ここではヴェーバーの「都市の類型学」とアダム・スミスの『諸国民の富』がとりあげられ、前者については、西洋史において都市が民主制や自律的な市民意識と密接な関係をもたざるをえない必然性が都市ゲマインデ論を中心に論証される。とくに西欧中世都市が近代都市形成に対して及ぼした影響力の連続面と断続面の関係に注意を払い、経済の発展が必ずしも政治的自律に帰結するものではないことを示し、それがゆえに「都市の類型学」は都市思想の重要な政治論的部分をなすことを指摘した。

他方スミスの場合、近代産業社会の入口にあつて、都市と農村の分業と生産力の差異への認識を通じたかれの都市観に分析の光が当てられ、かれの考える経済の正常な発展のコース（重商主義批判）に近代都市を措定すべきことの重要性が示される。その背後に農村の田園的な美しさを現状の都市批判に据え、調和の取れた都市と農村の互恵的関係が探られているとの解釈が示され、都市思想の経済理論的部分をなすことが指摘される。

そしてこの政治と経済の両輪が、以下の章で具体性に踏み込んでいく都市問題の基本的な方法態度の不可欠の構成要素として貫かれなければならないことが強調される。それを現代的な都市の状況から示すことも大事だが、歴史認識をとまなう政治経済的古典理論のなかで確定するところにこの章の意義を込めて論述した。

## 第5章 明治都市社会主義の航跡

ここでは第1部で獲得してきたモダニティの理論的基礎のうえに、その応用として片山潜、安部磯雄のいわゆる「明治都市社会主義」をとりあげた。かれらのキャリアと作品の追究のなかから、日本の近代化のなかではつねに取り残されていたテーマである、下からの市民的意識の覚醒の必要をこの困難な時代にあつてかれらがはっきりと認識しており、明治の中央集権的国家という環境の中でそれを最大の課題として正面から問い、その実現を理論的・実践的にどのようにめざしたかを発掘した。さらに、かれらがどうしても「近代都市」にこだわらざるをえなかった根拠である「都市独占事業の公有化」や財源問題が都市株式会社論や都市文化論に関連づけられて展開されており、これらの論点が現代都市において今なお、正面から考慮に付されるに値する問題であることを指摘した。

その叙述のなかで、片山の理論の根源性とオリジナリティ、安部の功利性を対比的に描き、いずれの側面も日本における市民社会の形成に重要な点ではあるが、その違いが後の両者に対照的な経歴を歩ませた要因となっていることに触れ、日本社会で、このような近代的な思考が、いかに中断あるいは変質させられていくのかを描いた。

## 第6章 ライト・ミルズの移民調査における社会認識

これも都市における市民社会論の可能性を探るケーススタディであり、ライト・ミルズによる1950年代までのプエルトリコ人のニューヨーク移民についての調査研究の内容を紹介し、その意義と限界を解明したものである。

この移民を必然化させる背景にはプエルトリコ側以上にアメリカの政治経済上の要求がある。プランテーションの商品作物としての精糖産業をアメリカはここに植え付けることによってプエルトリコを従属下におく構造を作る。他方コモンウェルスとしての地位を利用して景気の調整弁として形式上はアメリカ市民たるプエルトリコ人を移民として受け入れる。したがって「同化」や「適応」といった移民にかかわる事象が、支配的イデオロギーの文脈に置かれている様態をミルズは余すところなく描いていく。それはかれの社会成層論の最下層論として、かれの理論体系に正しく位置づけられ得るものである。

アメリカ社会は人種問題が長らく重い影を落としているが、この文脈でプエルトリコ人移民問題をみ

ると、同市民関係を形成するに当たって乗り越えなければならない実践的課題のひとつのありかが判明する。それは調査に現れる「中間色・女性」の移民の状況であって、島での社会的地位や能力を前提とすれば、アメリカで主観的に同化したい階層と、実際に身を処していかなければならないそれが決定的に乖離するという点である。「差別されるものが差別を生み出す」という悲しい構造が移民社会に根づいていく。この点へのミルズの着目は秀逸である。

しかし、これを移民の市民としての自立に向けた論理へと連結できないところにミルズの難点がある。これは社会調査における、動態的あるいは弁証法的視点の欠落に起因するところが大きく、第1章で示したアメリカ社会学のヨーロッパ理論受容における方法的偏差の問題として再考されねばならない点を、ヴェーバーとの社会調査の比較において指摘した。

## 終章 現代都市思想の諸相

「近代」の再考の上に構築される、都市を磁場にした社会理論——本論文はこれをめざしてきたが、社会科学の研究史のなかで、それがどのように位置づけられるのかをあきらかにするという課題が残されている。そのためには、この立場から、都市に関する思惟の発生史や都市認識の系譜を体系的・歴史的に叙述し、整理と展望を示しておかなければならない。この終章はその意味で、本研究全体の理論的総括と位置づけである。

著者はその段階を①都市が政治学や経済学のなかにいまだ埋没し、市民的な歴史認識を含みながらもその農村との対比のもとに一構成要素として叙述されていた段階（スミス・マルクス・ヴェーバー）。②資本主義の発達にともなって顕著になる都市問題が都市市民の実践的課題へと認識されていく段階（シカゴ学派）。③都市そのものが社会科学の固有の対象として認識され、哲学・経済理論・文化理論と相互に浸透しあいながら「近代」以降を射程に入れていく段階（ルフェーヴル、新都市社会学、ポストモダン等）、に区切り、都市思想の理論的歴史区分をまず示した。

そして本章では、とりわけ③段階におけるルフェーヴルの『都市革命』に現代都市思想に決定的な転換点と影響力をもたらしたものとして着目する。それは『資本論』の商品論を都市論として読み込むことから出発し、現代社会の矛盾と変革の糸口は都市革命にあるとし、同質性（交換価値）と示差性（使用価値）の矛盾を都市の現象分析と未来への志向に有効な方法論的道具に組み立て上げたことである。これにとどまらず『空間の生産』の段階に入るとかれは、空間論として都市論を構築し、テクノロジーの発展とともに増大する矛盾した抽象空間で展開される「誘導される差異」と「生産される差異」の対立が、都市市民の日常的な消費生活のリアリティに込められたうえで弁証法的（対話的）に社会変革を求める意識を形成する経路を論じるのである。モダニティが臨界点に達したとき、新たな展望が反省的に開けていく、という序章の問題提起上に位置する解釈である。

この展開は、複数階級を含む都市社会運動の現代的意義を主張したカステル、上からの権力的コミュニティ形成と都市的生活の生み出す示差性を基礎にしたコミュニティ形成の矛盾から都市に接近するハーヴェイなどの新都市社会学の理論形成に絶大な影響を及ぼした。それらは、マルクス主義の視角を出発点とし維持しながらも、そこから踏み出して、同じ出自をもつレギュレーション・アプローチの提起するアフター・フォーディズムの議論とも共鳴しあって、「ゆたかな社会」での抑圧のありようを示し、解放を展望する。そしてそれはさらに構造主義やポスト構造主義とも緊張関係を保ちながら、都市生活の変貌を視野に含んだポストモダニティ論へと踏み込んでいくのである。本章および本書の基調とする市民社会論としての都市思想は、モダニティに対抗的・対比的なポストモダニティに傾斜することはしないが、このような可能性を評価し、その延長に構想されるものである。

# 論文審査結果の要旨

本論文は、都市を磁場にした社会理論を「近代」の再考の上に樹立するとともに、「都市思想」という概念を提起しながら市民社会論の現代的意義を確認しようとするものである。とりわけ本論文では、ヴェーバーの近代認識の受容と展開（＝転回）を起点に据えて、レギュレーション・アプローチ、構造主義／ポスト構造主義、新都市社会学など、数々の社会理論が相互に交差し分岐する地平と位相を探ることを通じて、都市をメディアとして構築される社会的諸関係の新たな展開の可能性を社会的に位置づけようとするところに最大の特徴が見出せる。

本論文は、全体として2部構成からなる。まず序章で本論文全体を貫く方法態度と立場が、グローバリゼーション、脱分化・脱境界化、個人主義の融解と再社会化、消費におけるアイデンティティといったイシューの丹念な分析を介して開陳される。そして第I部では、「近代とは何か」という問いがヴェーバーの社会学理論の基底にひそむモダニティの両義性認識の確認からはじまって、それが「都市」という経験的領野にどうきりむすばれていくのかについての道筋の開示を通して深められていく。次に第II部では、第I部で示された道筋がさまざまな「近代の社会理論」との対質のなかで検証に付され、それらにひそむ「積極的なもの」の析出・再構成を経て経験科学の地平にどう接合されていくのかについて、市民社会論の彫琢という課題とかがかわらせて論述される。

第I部は3つの章によって構成されている。第1章「技術と組織の近代的編成」では、モダニティのあり様がヴェーバー自身に投げ返して探られる。具体的には「ゆたかな社会」を先駆けて達成したアメリカの産業化、大衆社会化の現実を背後要因とする技術論と組織論の文脈で、ヴェーバーの受容をめぐる批判理論の系と機能理論の系との批判的な整序を介して探られるのである。それはモダニティそのものの歴史性および問題性を正面から扱う前段階として位置づけられる。

第2章「マックス・ヴェーバーの近代世界」では、文字通りヴェーバーの近代認識を中核に据えて、その方法・内容・意義が作品史に立ち入って検証される。そしてそのことを通じて本論文の方法的核心をなすモダニティの歴史性および社会性への基本的座が据えられる。つまるところモダニティの歴史性が、近代の問題状況が成果と病巣が表裏になって社会のなかで実体的な形をとりはじめた「古典的近代」として析出されるのである。

第3章「モダニティの変容」では、如上の「古典的近代」が現在に向かって進行し、成熟していくプロセスとパラレルに立ちあらわれるモダニティの変容に照準が当てられる。具体的にはハーバーマスの「対話的理性」およびギデンスの「ユートピア現実主義」、さらにフーコー、リオタール、ボードリヤール等によるポストモダン言説の批判的評注をこころみるなかで、歴史認識を欠落させたモダニティ批判よりもモダニティの論理を透徹させることが必要であると主張され、併せて情報技術や科学技術の質的変化にまなざしを向けることの重要性が説かれる。

次に本論文の後半部分をなす第II部であるが、それは4つの章から構成されている。まず冒頭の第4章「都市思想の政治経済的古典理論」であるが、そこでは第I部でのモダニティとその変容に関する理解を導きの系として、ヴェーバーの「都市の類型学」およびスミスの『諸国民の富』を典拠としながら、近代都市のなかでの市民性の展開の道筋が示されるとともに、「都市の類型学」および『諸国民の富』自体が都市思想の政治論的部分、経済論的部分をなすことがあきらかにされる。そして政治と経済の両輪が都市問題への基本的座の設定に際して不可欠の構成要素としてあることが強調される。



第5章「明治都市社会主義の航跡」では、「明治都市社会主義」と総称される片山潜、安部磯雄の主張の裡に「近代都市」が叢生せざるを得なかった都市問題の諸相がさぐられるとともに、片山の理論の根源性とオリジナリティ、安部の理論の功利性を対比的に描述するなかで日本における市民社会形成のための思想的要件が考究される。結局のところ、「明治都市社会主義」の中断あるいは変質が近代日本の都市社会、畢竟、市民社会の形成に大きな影をおとしていることが指摘されるのである。

第6章「ライト・ミルズの移民調査における社会認識」では、都市における市民社会論の可能性をさぐるケーススタディとして、ライト・ミルズのプエルトリコ人のニューヨーク移民に関する調査研究がとりあげられる。それはミルズの社会成層論の最下層論として位置づけられるものであるが、同時にアメリカ社会学のヨーロッパ理論受容における方法的偏差を示す一つの範型としてあることが鋭く指摘される。

本論文の理論的総括をなす終章「現代都市思想の諸相」では、前章までの展開を踏まえて、都市に関する思惟の発生史と都市認識の系譜が体系的・歴史的に叙述される。そしてここでスミス・マルクス・ヴェーバーの都市論とシカゴ学派都市社会学、さらに新都市社会学の異同と接続の地平があきらかにされる。著者が都市思想の理論的歴史区分の上に現代都市思想に決定的な影響をおよぼしたのものとしてとりわけ着目するのは、新都市社会学を嚆矢とする都市社会学の空間論的転回であり、その中心に位置するルフェーヴルの、『都市革命』にはじまり『空間の生産』に至る一連の作品である。著者は、そこに都市社会学の理論的オルタナティブの一つの形とともに市民社会論としての都市思想の現時点での到達点を見出すのである。

以上、本論文は、これまで別個に取り扱われてきた都市思想、市民社会論、都市社会学の展開を有機的にむすびつけその接合と分岐の地平をあきらかにすることを通じて近代の機制を抉り出すことに成功している。そして都市社会学の展開に即していうなら、シカゴ学派都市社会学と新都市社会学との相互浸透の位相をつまびらかにすることによって、いまや多様なネットワーク・フローのメディアとしてある都市の「現在性」を踏まえた社会理論への展望を自ら示し得るものとなっている。

いずれにせよ、本論文は疑いもなく都市社会学ひいては都市学の進展に著しい貢献をなすものである。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認められる。